

説明的、

具体的ということ

花山多佳子

歌の批評で「説明的」と指摘されることがよくあります。一方で、「もつと具体的に」とアドバイスされることもあります。「説明的」と「具体的」を多くの人が同じようなことだと思わずらく、じやあどうすればいいのですか、とよく訊かれます。具体が生きていれば、それは説明ではないのです。情景や場面に語らせるのが具体的、言葉で解説してしまうのが説明的、とも言えます。たとえば「せせらぎの音さわやかに山の宿ゆたかな自然に心安らぐ」というような歌は説明的といえます。

叙景や草木を詠む歌で見るとわかりやすいので、いくつか例をあげてみます。

タンポポは雑草の中に悠然と一際光り勲章のごと

「タンポポは」からすべてタンポポの説明になっていますね。特に「悠然と一際光り」が「説明的」と言われる部分です。「悠然と」

「一際」と、主観をいきなり一般的な言葉で言ってしまうと読者にはイメージが湧きません。よく見られるものでは「楚々と」「凜として」「ほこらしげに」「ひっそりと」「咲き競う」などがあります。みな慣用句による説明です。「夕日に映えて」の「映えて」も実によく出てくる説明用語です。

「勲章のごと」という比喩はこの歌の眼目です。タンポポはたしかに菊花の記章のようですね。それだけで十分で、更に説明すると比喩が生きてきません。作者は「勲章」を更に形容するために「悠然と一際光り」と言ったのでしよう。ここで理くつが入ってきて、パツと見た瞬間、勲章みたい、と思った印象が台なしになってしまうのです。

タンポポが勲章に見えた、というだけを、どう一首にするか、ということになると難しい。だから余計な説明を加えていく気持ち、よくわかります。たとえば「タンポポは勲章のごと光りおり」と初めに言って「町のはずれの雑草のなか」「歩道の傍えの」など場所を入れるなどすればいいかもしれません。

上から順に説明していくのでなく、いったん切ってみる、というのも一つのポイントです。下で何か違うことを言うきっかけにもなります。むろん切れれば必ずいいということではないですが、試みてください。

畦道におはじきをばらまいたやう丸く黄色くたんばの咲く

この歌も「おはじきをばらまいたやう」が比喩です。比喩というのも新鮮であれば一つの具体として生きているのです。これは目に浮か

んでくるので成功といえるでしょう。でも「丸く黄色く」は余分な説明です。おはじきだから「丸く」はわかっていきますし「黄色く」は必ずしも「おはじき」とつながりません。「畦道に」は具体的にいいですね。足りないところをどうするかが思案のしどころ。形容詞で足りないところを埋めていくと失敗します。

歌を直しながら、調べを整えてゆくこともポイントの一つです。「畦道に／おはじきをばら／まいたやう」という句またがりになっていて、字数は合っているも読みづらい歌です。

「おはじきをばらまいたやう畦道にたんぼぼ咲けり」と一気に言ってみます。そのあとをどうするか。いろいろ考えられますが、一首の邪魔にならないよう、さりげなくことばを置くのがいいでしょうね。

おはじきをばらまいたやう畦道にたんぼぼ咲けり五月のひかり
おはじきをばらまいたやうに見えたのは、まぶしさからかも、と
思い「ひかり」を入れてみました。あるいは

畦道にたんぼぼ咲けりおはじきをばらまいたやうにたんぼぼ咲
けり

というのも一案です。繰り返しは「リフレイン」ともいいますが、これは重複の説明とは違います。むしろ、やたらにリフレインで調子よくすればいいということではありませんが、説明していくより、ずっといきいきすることがあります。

たまたま「たんぼぼ」の歌をサンプルにしたので、北原白秋のたんぼぼの歌をあげてみます。

いつしかに春の名残となりけり昆布干場のたんぼぼの花
朝ひらく黄のたんぼぼの露けさよ口寄する馬の叱られてゆきぬ
北原白秋

一首目はこれだけでも十分いい歌になるという見本のようなシンプルな歌です。これも「なりにけり」で切って、印象がすっきりしています。これが「春の名残の昆布干場のたんぼぼの花は」と願ぐりつくっていくと、たとえ具体的であっても説明調になってしまいます。そんな順序でつくっていくことが多いのではないのでしょうか。そして行きづまってしまい、余分なことを加えるはめになります。

この歌は「昆布干場」という具体がいいですね。昆布の黒に黄のたんぼぼが映えます。ここで「黒に映え」などと説明するとだめなのです。

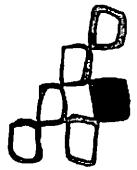
二首目も「露けさよ」で切っていますね。たんぼぼの花に口寄せる馬、とてもいい情景の歌です。昔は馬もいるし具体が生きた場面が多かったとつくづく思います。

紋白はかそけき脚にたんぼぼの花蕊抑えて蜜を吸いおり
落合けい子

蝶の脚が「花蕊抑えて」という具体的な細やかな描写が、単に花と蝶の取り合わせでなく、蝶の生の営みを生々しく感じさせます。

「命の限り蜜を吸いおり」とか「蜜を吸いおり生の営み」などと言葉で説明してしまつては台なしです。

短歌をたのしくポイント【3】



老いを詠む

花山多佳子

高齢化社会になって、老いの歌、介護の歌、病やめぐりの人の死の歌などが多くみられるようになりました。これから団塊世代が高齢化に入ればますます増えて、大きなテーマになっていくでしょう。団塊世代のわたしとしても、大いに関心のあるところです。

歌の内容はひとまずおいて、老いの歌について気になるポイントを一つあげてみます。

それは「老い」という言葉がいちいち入ることです。たとえば「老妻」「老夫」「老母」「老い二人」「老いわれ」というように。「老妻」に「つま」とふりがなを付けているのもよく見かけます。一首から老いとわかる歌の場合は、たんに「母」「夫」などでいいのです。デイ・サービスに行く歌や老人施設の歌などにも「老」が出てくるとくどい印象になります。むろん必要な歌もあるのですが。

また「老い」のほかに「卒寿の父は」など、還暦から始まって古稀、喜寿、米寿、卒寿、白寿などの言葉をかぶせる歌がとても多いですね。これらは祝いの日の言葉なので、年齢を言うだけに使うの

は、あまり賛成できません。それよりも年齢を具体的に出したほうが歌として生きます。

ひたたりと施設の壁に吸い付きぬ九十九歳の二足歩行は

大島史洋「ふくろう」

九十七歳のひとのほほゑみ何も見てをらぬ何が見えてゐるならむ

森岡貞香「夏至」

気力あれど体力のなきもどかしさ九十八歳のわれに苛立つ

井戸川篤子「友の会・彩歌」

大島史洋の歌は施設に入った父を詠んでいます。「老いたる父の二足歩行は」より「九十九歳の二足歩行は」がいいですね。「白寿の父の」でもやはり生きます。ここでは「父」を出さないことで、老いの存在を強く感じさせています。自分の父ということよりも、二足歩行である人間の老いのありさまをリアルに見つめているのです。

森岡貞香の歌も母を詠んでいます。「母」と言わず「九十七歳のひと」にしています。「九十七歳の母のほほゑみ」でもいいのですが、「ひと」で歌のひろがりが出ています。二首とも「老い」そのものを深く見つめています。

井戸川篤子さんは「友の会」方です。「気力あれど体力のなき」というもどかしさが「九十七歳」とわかって、むしろその気概におどろき、励まされます。井戸川さんには、こういう歌もあります。

よく見ればわが十指みな指紋なしくすり指のみ渦でありしに

井戸川篤子

指紋がなくなっていたという気づきにはとさせられますが、特に「くすり指のみ渦でありしに」という回想が、身体の変化をとらえて胸にしみてきます。この歌も「老いの指」というような言葉を入れると良さがなくなります。「老い」と言わずに老いの感慨の滲む歌です。

もう一首「友の会」の方の歌をあげます。

さよならは言はず姉との電話切る明日も語らむ幼き日々を

富田孝子「友の会・彩歌」

この歌も老いという言葉はなくとも老姉妹ということがよくわかります。「さよならは言はず」で、いつ、別れがくるかはわからないうが、という思いがあります。「明日も語らむ」もそうですね。家族の歌のほかには老いからの兄弟・姉妹の歌というのも独特の良さがあるように思います。幼い頃の記憶を共有しているのは兄弟姉妹ですし、誰より寄り添う気持ちになれる相手かもしれません。姉妹そろって温泉旅行しました、というような歌が多いのですが、そういう事からの報告ではなくて、何気ないやりとりや、場面などを歌にするというでしょう。

堪へ性なくなりし夫とおもふなり五十年余われを堪へ来て

聞こえ来る軍艦マーチに手を叩く六十九年まへの少年

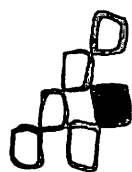
藤川弘子「夏の窓」

夫を詠んだ歌です。これも老いを歳月の長さでうまく表現しています。一首目は、老いて堪へ性のなくなつた夫、というだけでなく、「われを堪へ来て」と思い遣つたところ、感心しました。なかなかこうは思えないものですから。何でもお互いさまなんですよ。一方的に断定しがちですが、互いの関係や、相手の気持への想像力をはたらかせるのは、老いて重要なことかもしれません。二首目は「夫」と言わず「六十年まへの少年」と言っています。老人の心の中には少年もいるし、青年もいます。軍艦マーチに手を叩いているのは老人でなく少年の夫なのです。だからこそ枕詞のように「老」を付けるのは考えものだと思ふのです。

他にも「足わるき」「病の」「惚けたる」「リハビリの」「独り居の」などがくつつく歌が多いのですが、状態がイコール、その人みたいになってしまつて気の毒な感じですが、「リハビリに通う夫」とか何か動詞があればいいのですが「リハビリの夫」といきなりつけるのは気になります。「認知症の」もよくありますが、先日は「認知の父」というのがあつておどろきました。子供を認知した父かと思つてしまします。

認知症の歌もとても増えてきています。物忘れ、認知できない状態の場面は切実ですが、パターンになりやすいので、病気のことは一度あたまたから抜いて、その人を見つめることも大切と思うのです。介護の歌、という枠を離れてみると、その人のみずみずしい少年や少女が見えるかもしれません。自分の場合も同じです。

短歌は状態や境遇から少し解き放つためのものでもあります。



回想をうたう

花山多佳子

最近 は行動範囲が狭くなって歌う材料がないんです、という声をよく聞きます。旅行や外出ができたからといって、歌ができるとは限りません。でも確かに日々変わらない生活の中で、何を歌おうか、と思いいくぐることはあるでしょう。そういうとき、記憶の引出しを開けて、思い出や回想の歌をつくってみるのも一案です。

といつても簡単には浮かびません。思い出すには何かきっかけがあります。ふっと自然な糸口があればいいのですが、ないときは何か「題」を決めて見てもいいでしょう。というのは常々、短歌教室などで「題」を出すと、ふだんの歌にはない思い出の歌が飛び出して、おもしろいからです。

先日も教室で「缶」「瓶・壺」という題を出してみました。そのとき出た歌を紹介します。作者名は省きます。

片足を空缶にのせ見まはせば誰もあなくてアキアカネとぶ（缶）

これは子どもころの缶蹴りの思い出の歌です。でも現在形でうたわれていたので、私はわかりませんでした。缶に片足のせて見回すって芝居がかったことするなあ、と思ったのでした。それで「缶蹴りの缶に足のせ」と直してみました。

回想の歌を現在形で詠む。これは一つの問題点です。現在形で詠んではまずい、ということはないと思います。かえっていきいきすることもあるのです。ただ内容によっては理解できなくなる場合もあるので要注意です。この歌は「缶蹴り」を登場させれば、思い出ということがわかるので現在形でいいでしょう。他の子どもたちがみな逃げてしまつて誰もいない。そのときの気持ちがまるで今のように再現されています。

「缶」という題詠では「缶蹴り遊び」が何首も出ました。「缶ぼっくり」も出てきました。そういう引き出しが開いた感じでした。

十五夜には一升瓶に薄活けお供へを食べし日のなつかしさ（瓶）

「瓶」という題では「一升瓶」がいくつも出ました。一升瓶でヘチマ水を探るとか、お醤油を買いに行くとか。一升瓶に薄を活けるといいうのも最近ではあまりなく、なつかしいなあと思います。題というヒントがあつて、思い浮かべた場面でしょう。ここで一つの問題点は結句の「なつかしさ」でしょうか。これでもいいのですが、思い出の定番というかんじです。なつかしいのはわかっているのですが、言わずもがなでもあります。ここは、たとえば「母と二人で」「家族七人」「子どもら三人」など、その場の人たちを入れてみると、

場面がより具体的になって、どんなふうになつかしいのかが伝わってくるシーンになります。

他にも、回想の歌の定番のフレーズはいくつかあります。「速き日」「日は遥かなり」「今も忘れず」「幼かりし日」など。ある程度しかたないと思いますが、あまり紋切り型にならないように工夫してみましよう。

石臼のずれてかさなりぬし不安よみがへりつつ遠きふるさと

大西民子「無数の耳」

この歌も「石臼」という物の記憶です。石臼のずれたかさなりを「不安」と表現して、すぐれた感覚の歌になっています。そこから下をどうするか。定番のフレーズを「つつ」でつなげて、紋切り型になっていません。ふしぎな魅力がありますね。

天ぶらの大き蓮根美味かりき町内会の出征祝ひに

久保周子「彩歌」2016・冬

新嘗祭の「ナメ」がおかしと笑い合いぬ意味知らぬまま七十年
過ぐ
中村暎枝「彩歌」2016・冬

二首とも戦時中の回想の歌です。重苦しい戦時でも若さは紛れなく息づいています。一首目は、出征祝いの記憶というと、蓮根の天ぶらが美味かったということなのです。兵士のことはたぶん記憶になく。とても率直でリアルな歌ですね。「少女の日」「若き日」など

と説明しなくとも、場面をきちんと描けばわかります。

二首目も「新嘗祭」という神事であっても「ナメ」っておかしいと笑ってしまふ。女学校の友達どうしようか、楽しい思い出です。「七十年過ぐ」というかたちで、現在につなげているところに工夫があります。

人はごく些細なことにかぎって鮮明におぼえていたりするものです。瓶や缶などの物、また食べ物や、ちょっとした人の言葉など。そこから歌を引き出してくると、当時の日常や時代そのものが浮かび上がってきます。

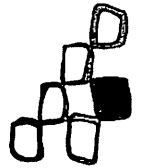
自分の一生を振り返ってみようと構えて「農に生き」「わが一生」などと大きく歌い上げると、みな類型的な歌になってしまいます。むしろ回想の歌はささやかなことだけではなくて、重たいこともあれば、辛いこともあります。また少し抽象的にうたいたいテーマもあります。

かの村や水きよらかに日ざし濃く疎開児童にむこき人々

小野茂樹「黄金記憶」

小野茂樹は小学校時代の疎開体験を連作でうたっていて、これはその中の一首です。これはどうしても言いたかった、というテーマでしょう。自然は美しかったが人々はむごかった。ストレートすぎるほどの断定が胸を打ってきます。

回想はあるときは連作にしてみるのもいいかと思えます。自分のために、その作業が必要な時もあります。



文語と口語

花山多佳子

「誰が見ても」はごくふだんの物言い、短歌にはめずらしい初句です。あとは文語なのですが「なつかしくなる」も何かくだけて口語調ですね。ささやかな思いにとてもよく合っています。

考へれば、

ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。

煙管をみがく。

「悲しき玩具」

短歌は基本的に文語調なのと言っているのですが、それでも今、和歌のような文語を駆使する人はめずらしくなりました。たいへいは日常使う平易な言葉を使って、助詞や助動詞で文語っぽく整えているという感じではないでしょうか。たとえば「去りつつ」「去りし人」「去りぬ」「去りたり」「去れば」くらいの範囲の文語でしよう。

一人の作者でも、あるときは文語調の歌、あるときは口語調の歌も詠む、そういう時代です。それも、あまり意識せずに使い分けしているといえます。

振り返ってみれば明治時代すでに石川啄木はうまく口語を取り入れて、日常のわかりやすい言葉で歌をつくらうとしていました。

誰が見ても

われをなつかしくなるごとき

長き手紙を書きたき夕

「二握の砂」

これは文語でしょうか、口語でしょうか。「考えるとほんとに欲しいと思うこと、あるようで無いね」と言えば丸ごと口語です。ちよこつと語尾を文語にただけ。厳密に区別することはあまり意味がないように思います。当時は異例の短歌だった啄木の歌は、現在ではごく普通になっていて、だから親しみやすいのでしょうか。

一首の中に文語と口語を混ぜていいのですか、とよく質問されます。この「混ぜてもいいのか」という質問は、たとえば上が文語で下が口語といった思い切り混じった歌をこの頃よく見るからではないかと思えます。啄木タイプの自然な感じの歌のことではないのでしよう。

混ぜかたの際立った歌の例を少しあげてみましょう。

米研ぎて日々の飯炊き君が傍にあと何万日残つてゐるだらう

河野裕子「体力」

この歌を文語調で統一すれば

米研ぎて日々の飯炊き君が傍にあと何万日の残りをらむか

とでもなるでしょうか。作者は「をらむ」「あるらむ」とかにするとごく型通りの感慨に思えて「残つてゐるだらう」と字余りにしてまで実感をこめて言ったのでしよう。では、上も口語調にしてもいいわけですが、上の文語は捨てがたかったですね。又、上と下の落差をあえて打ち出したとも言えます。

バンザイの姿勢で眠りいる吾子よ　そうだバンザイ生まれてバンザイ
俵万智「ブーさんの鼻」

枝豆は自分で剥くから美味いの　子どもが皿に剥きしてくれた
吉川宏志「曳舟」

大利根の底へ引かるる釣り糸よ　死んでもいいが死ぬのはこは
坂井修一「亀のピカソ」

たまたま三首とも一字開けにして文語と口語の部分の差をはっきり打ち出しています。つながっている歌でも、こういう例は多くみられます。自分の本音とか心情を吐露するところだけを口語にして、眩いたり叫んだりする、という表現です。急にモードが切り替わるところが斬新な印象。作者が十分選んでやっている表現なので、やたらに真似するべきではありませんが、こういうのも今「あり」だということ。当然、認めがたい、という人もいるでしょう。

また会話が取り入れられている歌は、そこだけ口語にすることがよくあります。

五年日記書きつつ妻がふいに訊く土曜日あなたと出掛けたかしら
平成28年度全国短歌大会作品　荒井幹雄

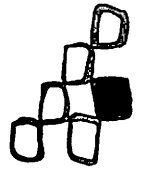
砂糖パンほんとおいしいと川のほとり草の上こゑを揃へて言ひき
小池光「思川の岸边」

口調をそのまま入れて場面や表情が見えるようです。台詞というのは話し言葉のままが生きますね。これは文語、口語のミックスというわけではなく、ごく普通といえます。

では、特に注意すべきポイントは何でしょうか。

たとえば、「言ったらし」「言いしらし」「欲しいらし」「悲しいらし」「見たいらし」「降り出したらし」など「らし」が変な言葉で頻出します。これは、口語に文語をくっつけているわけですね。このように、一つの語に文語・口語をミックスしないこと、です。「雨が降り出した」と現在のことを過去形で言うのは口語の特徴なので「降り出したらし」と口語で言うか「降り出づるらし」と文語にするかどちらかでしょう。

「思ひしだけなる」というのもありましたが「思ひし」が文語で、そこに「だけ」という口語が続くのは妙な感じがします。「姿見えなき」「言いてある」「言わなきこと」なども気になる表現です。かつて変だった文法も使われているうちに通用するようになっているので、だんだんそうなるのかもしれない。ただ最低限、現在の時点で変ではないかどうか吟味する必要はあるかと思うのです。そこを抑えれば、文語・口語のミックスは柔軟に考えていいと思います。



時制の助動詞

花山多佳子

時制というのは過去、現在、未来などの時間を表す文法のことです。短歌では短いなかで時間の表現をいかにするか、そこに文語が活用されてきました。時制を表す助動詞はいろいろあります。文法の説明から入るとややこしいので、まず実作から見ていこうと思います。

負ふ母の歩調に合はせ揺れるたる弟の足裏見つつ歩みき

仙田篤子「万の螢火」

おんぶされている弟さんの揺れる足の裏をじっと見ながら歩いていた、という思い出の歌です。何か切ない情景ですね。全部が子ども頃の回想なので、過去の助動詞「き」で止めています。最後を過去形にすれば、そこまでの中身は現在形にしてかまわないわけですね。「負ひし母の歩調に合はせ揺れてゐし弟の足裏見つつ歩みき」と、いちいち過去形にしなくていいのです。

扉を開けし刹那飛び立つ雀二羽浴びぬし土に窪み残して

遠藤米子「彩歌」2017・冬

「窪み残して」がとても良くて★をつけた歌です。「開けし」「浴びぬし」と「し」が二つあって、時間にはずれがあるわけですね。これは「開けし」を「開けたる」にしてもいいかと思えます。「開けし」が現在の時点のことなので時間差がはっきりします。あるいは「扉を開ける刹那」でも、意味は正しく伝わるでしょう。

考へを断ちて思ひき夜明けなば柱時計のゆるめるを巻かむ

田谷鋭「乳鏡」

床についていて何か考えていたのでしよう。それを中断して、夜が明けたらゆるんでいる柱時計のネジを巻こう、と思った、ということです。よくある心理の流れを掬いとって味があります。

「思ひき」は「思ひし」とすることがよくあります。「き」が強く響くので「し」の方が好まれるようなのです。そうすると「思ひし夜」と下にかかっても読めて、切れるのか切れないのかはつきりしません。歌の途中での連用形止めは、読みが紛らわしくなるので要注意です。

この歌には文語の時制がいろいろ入っていて参考になります。「夜明けなば」は夜が明けたら、ということ。未来の推量を表す「なむ」の仮定形です。「巻かむ」は、巻こう、という意志ですね。「ゆるめるを」はつい「ゆるみしを」と言いそうですが、今もゆるんでいる状態にあるので過去の「し」でない方がいいのです。

はかなごとわれは思へり今までに食ひたきものは大方食ひぬ

斎藤茂吉「たかはら」

はえぎはのあたりに淡く陽がさして雲を見てゐる君二十二になりぬ
河野裕子「森のやうに獣のやうに」

「ぬ」は物事が自然に推移して完了した、という意味の時制の助動詞です。その感じがよく出ている歌をあげました。茂吉の歌は、たいたことではないけれど、ふと思つた、今までに食べたいものは大方食べたなあ、という淡い感慨です。まだ五十歳にもなっていない頃の歌ですが、一つの老いの感慨なのです。「食ひぬ」を「大方食ひたり」「食ひつ」などというところ、なんか積極的に食ひまくつたような感じになりますね。

ついでに触れると「思へり」は、思ひてをり、ということ、現在継続中といった感じ。この「り」は四段活用 of 助動詞とサ変動詞にしか付けられないので要注意です。「言へり」「咲けり」「愛せり」など、たいていはいいのですが、「聞こえり」「覚めり」「食べり」などは言えません。この用法の誤りはとても多いので、使うときにちょっと意識して、確認するように心がけて下さい。たとえば辞書で「食べる」を引くと「下二」と書いてあります。これは下一段活用ということなので、「り」はつけられないと分かります。

二首目はぐつと若いときのみずみずしい河野裕子の歌。いま雲を見てゐる君は二十二歳になったのだなあという思い。これも自然な時の流れの感慨なので「ぬ」が合っています。「ある」「なりぬ」とここも口語と文語がまじっている歌ですね。

まだ暗き沼の面を見てゐしが鳥鳴く方へ歩みはじめつ

内藤明「虚空の橋」

本当に欲しいものだけメモをするノートを秋の日付で終へつ
澤村斉美「夏の鴉」

「ぬ」が自然の推移を表すのに対して「つ」は自分の意志の入った推移を表す助動詞、と解説にあります。たしかに「つ」は強い響きがあります。でも一般には「ぬ」も「つ」もそう区別なく使われているようです。この二首は本来のニュアンスがある歌ですね。

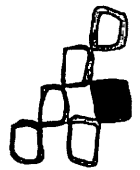
ほんやりと沼を見ていたが、気を取り直すように「歩みはじめつ」という心の状態の推移がよく見えます。二首目は「終へぬ」「終はりぬ」と「ぬ」でなく、あえて「つ」にして、自分が終わらせたのだという意志をこもらせています。

くさむらへ草の影射す日のひかりとほからず死はずすととなら

む 小野茂樹「黄金記憶」

ドン・ガバチョ口髭白くなりにつむへうたん島はいづこ漂ふ
内藤明「虚空の橋」

「らむ」は未来、「けむ」は過去推量の助動詞です。「白くなったたろうなあ」ということですね。文語は時制の表現が豊かにありますが、だんだん使われなくなる傾向にあります。それは少し残念でもあります。短歌は一首に流れる時間が大切。まず人の歌の時制を鑑賞してみてください。



思いを述べる歌

花山多佳子

で読ませるのは、この歌の調子の迫力も大きく作用しています。また「むなしくなりぬ」があることで単なる平板なスローガンでなくなっています。

まあいいかとつぶやく日々の多くなり「まあ」の背後に鶴は立ちこむ
小高賢「秋の茱萸坂」

この歌集にはこういう歌もありました。「まあ」を肯定できない状況であることを結句に滲ませていきます。

いふべきことあまたあれども言はざらむ悲しむとなく寂しむとなく
岡井隆「短歌春秋」2017・7

今年の「短歌春秋」選者二首の中の一首です。小高賢の歌とテーマが重なりつつ、こちらは言うべきことはたくさんあっても言わなだらうね、というのです。「悲しむとなく」の「となく」は、悲しむとなく悲しむ、というニュアンスではないかと思えます。

こちらは小高賢より老境の諦念ともいうべき感情がただよいいます。一首の調子も張り切らず、じわっと滲むものになっています。心境表現に文語調というのはよく合っているんですね。

文学に力のありしあのころのだからこそ苦しかった青春

岡井隆「臓器」

同じ作者のこういう歌はどうでしょうか。「ありし」と文語調で始まって「だからこそ苦しかった」と口語に変わっています。現代と違ってあのころは文学に力があつた、という時代への感慨から、そのせいで悩まなくてもいいことまで悩んで苦しかったんだ、とい

具体的なきっかけがなくとも、ふと過る思いとか考えがあります。

それをそのままストレートに詠んでみるというのもおもしろいものです。万葉集の昔から、物に託して思いを述べる歌を「寄物陳思」、ただに思いを述べる歌を「正述心緒」と言つて、詠み方に二つの伝統がありました。物や情景に託して歌う方が具体があつていと言われるのですが、具体がなければいけないと決めつけることはありません。思いや感慨、また意志だけの歌が読む人の胸に沁みたり、考えに目を開かれたりすることもよくあります。

言うほどにむなしくなりぬしかしまた言わねばならぬ言つてこ

そわれ
小高賢「秋の茱萸坂」

一首を三つに切つて「しかし」から懸命に自分を奮起させ、自分に言い聞かす意志がじりじりと迫ってきます。この歌は東日本大震災後の反原発などの志を述べたものですが、時代背景を越えて普遍的な心の葛藤として強く伝わってきます。「言う」の繰り返しだけ

う自分のほやきに移る、そんな感じでしょうか。この歌の思念も、かならずしも作者と同じ時代でなくとも共有できる気がします。戦後生まれの私でもそう思えます。同時に、この作者の青春には戦争という時代の苦しさもあつただろうに、と思つてみたりします。

やはらかに息ふさぎくるものありて善意といふは距離を許さず

正古誠子「卯月の庭」

作者には何か具体的な経験があつたのでしょうか。それは言わず「善意」について述べています。人の心に土足で踏み込む、とか慣用表現で言つてしまふとつまらないのですが「距離を許さず」に真理を突いた印象があります。他人のことを指摘する歌というのは、とても難しいものです。単なる悪口でなく、人間というものの本質、機微に触れたものがぞくといいいですね。

少子化のいよよ止まらぬ世の中に年のわからぬ人の増えゆく

大滝慶作 河北歌壇

たしかに、と思いました。少子化は歌によく出てきますが、それが下では意外な感想に行きます。大きな世代差がなくなつて、ある年齢からは個人差で若作りの人が多くなつて、さつぱり年がわからぬ。ちよつと不気味な現代風景をキャッチしています。

ちよいと出て豆腐買ひにゆく店もなし心遊ばず春の日暮れを

島田修三「帰去来の声」

「豆腐買ひにゆく店」は具体的ですが、あたまの中のイメージでそ

んな店は「なし」という歌です。だから心が遊ばないよ、と受けたところが味わいです。あの豆腐屋を思い出す、という回想の歌ではなくて、たとえばそういうこともなくなつたよ、春の日暮れのつれづれの情緒もないよ、ということでしょう。今は車でショッピングモールに乗りつけるような時代になってしまいました。これも一つの時代考察の歌といつていいかと思ひます。

折々に物申したくなることつてあると思ひます。それをそのまま言えるのも短歌あればこそです。こんなこと当たり前、とかつまらないと思わずに歌のかたちにしてみてください。だんだん一首に収めるコツがわかつてきて、言いたいことが言えるようになります。

ちよつとした考えを言うことが得意だつた代表が石川啄木です。それが人々の心をとらえたともいえるでしょう。

何処やらに沢山の人があらそひて

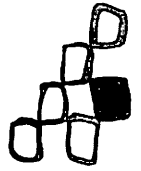
鬮引くごとし

われも引きたし

石川啄木「一握の砂」

「鬮」という比喻が効いています。幸運をつかむチャンスがどこかにあつて、そこでみんなが争つている。自分の加われないところ。 「われも引きたし」と言い放つたところが率直で切実です。明治の世は競争社会、格差がひどくなつてきた時期でしたが、この歌は時代を越えて誰にも共感できるものになっています。

短歌をたのしく ポイント「8」



歌の生气と持ち味

花山多佳子

「短歌をたのしく」も最後の回になってしまいました。まだ、いろいろ書きたいことはあるのですが、二つほど強調しておきたいことがあります。

私たちが人の歌を読んで、なんかいいなあ、と思う場合、それはどんなところに惹かれるのでしょうか。そこに書かれている内容や意味がいいからと考えがちですが、その内容がどう歌になっているかが大きいわけですね。単に「表現」「調べ」といった言葉だけでは説明しにくいかもしれません。

短歌友の会作品集「彩歌」には「私の好きな一首」というコーナーがあつて、受講生が前号の作品から選んでコメントしています。その中から二首紹介してみます。

今日出来て明日は出来なくなる身かも例へば作るたとへば歩く

「彩歌」2017夏号 鹿間映子

内容に共感して二人のかたがコメントしています。内容に加えて

「例へば作る例へば歩く」という対句が生きているのでしょうか。ここが「料理を作るも歩くことすら」とかだとパツとしなくなりませぬ。「身かも」の「かも」は詠嘆でなく「かもしれない」の「かも」でしょうか。ここは少し気になるところです。そこは措くとして、この下句の「例へば」の簡潔な切れの良さ。短歌は散文ではなく韻文なのです。韻文の力をどこに生かすか、ということが作歌のポイントの一つです。歌は生气が大事です。

亡き孫の粥食みし匙捨てがたく箸立ての中低く残れり

「彩歌」2015秋号 富田孝子

胸を打つ内容です。この歌のコメントではお二人とも「低く残れり」に注目なさっています。ほんとに「低く」の一語が心に迫ります。これも「箸立ての中にいまだ残れり」だと「捨てがたく」とダブった印象になり、どこか歌が弱い。そうなる歌が実は多いのですね。「低く」で歌になっているわけです。「低く」は事実だけでありながら、自分の心における匙の在り方でもあるのですね。ただ残っています、という報告にとどまらない歌になっています。

歌人のうたからもいくつかあげてみましょう。

終りなき時に入らむに束の間のあとさきありや有りてかなしむ
九十三の手足はかう重いものなのか思はざりき勞らざりき過ぎぬ

土屋文明「青南後集」

「終りなき時」というのは死後のことです。死後はもう終りのない

永遠なのに、そこに入るときにはほんの束の間の「あとさき」がある。その「あとさき」がかなしい。「ありや有りて」という問いと答えのかたちの抑揚が、歌として響いてきます。これは文語の力ですね。ここに思いがこもるわけです。

二首目の「思はざりき労らざりき過ぎぬ」は文明独特の文体で、そう真似はできませんが、やはり歌の韻文の力を感じさせます。

この手足の重さは想定外だった、労つてもこなかった、そうして歳月は過ぎた、という嘆息がこの文体によって打ち出されてきています。調べがいいというのは違って、かなりの字余りですが、一つの調べを持ち、それが心境と重なって伝わってきます。

春の日のベンチにすわるわがめぐり首のちからで鳩は歩くを

内山晶太「窓、その他」

こちらは若い人の歌。鳩は首のちからで歩いてるわけではないでしょうが、首を上下に動かしながら歩く様子をユニークにとらえています。対象に関心を寄せるからこそ出来た歌です。「首のちからで」が最大のポイントなのですが、ここでは結句の「を」に注目してみましよう。「首のちからで鳩は歩けり」「鳩は首のちからで歩く」などとしても悪くなさそうです。でも、この「を」の助詞一字が生きているように思えます。「を」はたとえば「くなもの」というような詠嘆です。「すわるわがめぐり」に対して、この「を」が効いてきて、一首に動きが生じます。

こうして見ると、ちょっとしたところで歌に生氣が宿るところとがわかります。比喻の力とか着目の良さ、内容の良さということ

だけではなく、その言い方や調子に韻文としての歌のいのちがあるのです。

最期に一つ大いに言いたいのは、自分の歌の持ち味を大事にしてほしいということです。

今、短歌大会や新聞、そしてアンソロジーや歌のハウツー本がたくさんあります。一首単位で人の歌を見ることが多いですね。感心して、自分もこんな歌つくってみたい、と思います。それは励みになっていいことなのですが、いろいろなタイプの歌があつて、混乱したり、また器用な人は「いいとこどり」して巧くなっていったりします。どちらにせよ、自分の歌を見失いかねません。

自分の歌の持ち味は何だろう、と一度考えてみてください。それは、どんなことに関心をもつてつくる傾向があるのか、ということでもあります。風景や植物、動物かもしれません。人間の生活、心理かもしれません。時事や社会に強く関心のある人もいます。

「心や感情を言葉にする」とよく言いますが、心や感情はそれ自体独立してあるわけではなく、何かに触れて生じるものですから、人それぞれに違います。その違いが持ち味といえるでしょう。

よくお便りで、自分の歌の狭さとか、奥行きなさ、ひらめきのなさを言ってこられます。比喻を使いたい、単純すぎる、ひねりがない、などという嘆きもきかれます。でも私から見ると、いい歌をつくっておられて、持ち味あるのになあ、と思うことが多いのです。

自分の持ち味を磨く、そこに腰を据えてつくり続けることをころがけてみてください。